

喫煙は、さまざまな病気の原因となることを繰り返し紹介してきましたね。たとえば、慢性閉塞性肺疾患(COPD)、狭心症、心筋梗塞、脳卒中、動脈硬化などについて覚えてくれているでしょうか。どの病気もタバコを吸ったからといって、すぐに発症するわけではありません。だからこそ、喫煙者はその危険性を自覚するのが難しく、毎日毎日吸い続けてしまいます。すると、長年の喫煙で発病し手術が必要な事態になる事も考えられます。

そこで、下のポスターを見てください。じつは喫煙者が手術を受けるとタバコを吸っていない人に比べ危険な要因がある事を警告しています。具体的には、つぎのような事が予想されるそうです。

- ニコチンは血管収縮作用があるので、傷の治りが悪い。
- 酸素を全身に運ぶヘモグロビンが喫煙による一酸化炭素に奪われ、酸素を多量に必要な手術中、酸素が足りなくなる可能性がある。
- 全身麻酔を受けた場合、手術中から痰が多くなり、手術後の咳で痰がうまく出なくなり肺炎などの肺合併症が多くなる。

手術前には、まず

禁煙

- point1
喫煙は手術の合併症を増やし、傷の治りも悪くします。
- point2
禁煙はいつから始めても合併症を減らす効果があり、早いほど有効です。
- point3
禁煙は手術後も継続することで、病気の経過を改善します。
- point4
受動喫煙も手術経過に有害です。家族が手術なら禁煙しましょう。

公益社団法人日本麻酔科学会
禁煙部 禁煙指導員 奥田 恭久

以上のような理由で、喫煙者には手術前6週～8週間の禁煙が必要だと言われています。そして、手術前の禁煙指導でも禁煙できない場合は手術を見送る病院もあるそうです。それほどタバコは手術に大きな危険をもたらすのです。

そもそもタバコを吸い始めなければ病気になる確率も少なく、もし手術が必要な事態となっても、このような危険性を心配する必要はありません。

そう思うと、今さらわざわざタバコを吸おうと考える人はいないでしょう。でも、もし身近に喫煙者がいれば、こんな事も教えてあげてください。

産業デザイン科 奥田 恭久